黄金郷

上野ちづこ

Coriolus versicolor
GROUND-IVY
Glechoma hederacea
WILD CHERRY
Prunus avium
DOG'S MERCURY
Mercurialis perennis
YELLOW ARCHANGEL
Lamiastrum galeobdolon
BROAD BUCKLER-FERN
Dryopteris austriaca

K81-50

句集

黄金郷

上野ちづこ／江里昭彦編

夜叉書房

工業学院図書館
蔵書印

黄金郷

一九九〇年一〇月一〇日　印刷
一九九〇年一〇月一五日　発行

著　者　上野千鶴子
編　者　江里昭彦
発行者　齋藤愼爾
発行所　深夜叢書社
〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町五五二　千田ビル四〇二
電話　〇三―二〇七―八〇六四
振替　東京九―一四五八三一

印刷　㈱欧文整版
製本　富士製本

©1990 by Tizuko Ueno

はじめに

これは俳句です。この本は、だから、句集と言うことになります。これを俳句と思わない人は、さようなら。

一九七二年から八二年までの十年間、わたしは俳句をつくってきて、ようやく俳人を廃業することにしました。およそあらゆる詩人のかくれたのぞみは、詩をつくらずにすむようになることなのですが、わたしもそのゴールに到達したようです。わたしの作品は、これ以上一句もふえません。だからそれを記念して、処女復帰句集を、刊行することにしました。

作品は、クロノロジーにしたがって編まれていますが、ふつうとは反対に、逆編年体に配列されています。読者はわたしとともに、俳句を書かなくてすんだ始源の言語への旅を、あゆんでもらうことになります。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

黄金郷／目次

EL Dorado

はじめに　1

I

〈わたし〉のためのポリフォニー　13

快楽の終点／江里昭彦　⑱

ことば師　20

からんどりえ　22

選民伝説　26

同　胞　30

孵卵期　32

鳥　34

ほんとうごっこ　38

花便り　40

パックス・ジャポニカ　42

四文字のバラード　46
作品評／竹中　宏　50
甘藍郷またはエルドラド　54
やはり、ちづこ頌／江里昭彦　57
地下鉄地獄　58
マダム呪々　62
合評抄　65・68～70
補陀落行　66
予言者受難　72
都市へ　76
百科全書派以後　78
過ぎし時への献歌　80
花田清輝追悼――「復興期の精神」抄　82
高桐院連弾　86

夏の終わり　88
雨の森　90
帆走　92
冬芽　94
ルバイヤート拾遺／江里昭彦　㊺
幻視者　98

Ⅱ

片歌恋唄――またはナルシスの匣　103
意味からの遁走――私のハイク・ノオト　108
俳句の私（わたくし）　120
〈私〉の解体――「俳句の私」再論　129
俳句のよみ方　133
偏愛的一句評　138

玩具箱の中から　141
雑感　143
俳句の解体または解体俳句　146
Ⅲ
シンポジウム　江里昭彦／工藤大悟／玖勢野博／上野ちづこ　152
Ⅳ
十年の後——あとがき　177
Ⅴ
解説——上野千鶴子の反〈女流〉俳句
あるいは跡を濁して飛び去った鳥について　江里昭彦　187
後記——更なるあとがき、あるいは出産顚末記　江里昭彦　200

編集　江里昭彦

装幀　齋藤愼爾

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

黄金郷（エル・ドラド）

ナルシスの匣

——ちづこ秀句三十選　江里昭彦編

愛咬の前後溶けゆく時間の端
記憶の分布地図(ドットマップ)にある腐蝕
柑橘(オレンジ)の甘き昏倒　わが脱自
エンサイクロペディア海の深さを藍で知る
木の実落ちる時の地のピアニッシモ
海に向きあう連綿と死に続けてきた家系
春羊歯類ももいろドレスの中に満ち
俺が齧った歯形をつけて月が欲け
耳鳴りは海の音補陀落(ふだらく)行せよと
海路なれば三拍子の曲を偏愛す
縮尺が間違っている短脚犬(ダックスフント)
まず一本喫ってからチュトワイエ
誕生日だから感情の大浪費
纏足がぞろぞろ地下生活者の上を

イテマエ　裾汚さざる白衣(びゃくえ)の祥
唾する尿する　地の自浄力疑えば
ホルモン屋にくれてやる救急外科の裏口から
暗殺者の手が撫でている青い尻
故障した子供たち　廃園の花として
不機嫌である特権　娘たちに
翼　全天を覆う　曇り
日毎の包丁　夜毎の殺意
遮音室で高くなる　耳鳴り
子供は鳥　かはたれとたそかれにさざめく
婚礼の荷に入れる　弟の義足
みんな蹴落とす　方舟のピルグリム
欲望の沖へ　髪を濡らして
さらわれてみる　わたしの境界線
なぞなぞはいつも何がのぞみ？
わたしというミスキャスト　幕が降りるまで

[

〈わたし〉のためのポリフォニー

俳句を、退屈だと思いながらここまで来てしまった。たぶん言霊のようなものの力が、わたしを把んで離さなかったからだろう。口に出してしまった時に、それが言いたかったことだと気づくような言葉。何がのぞみときかれる―やってしまったことを、のぞんでいたとしか、言いようがない。誰がわたし?――あらわれてしまった、いくつものわたしに耐えつづけるほかない。わたしたちは、見る私と見られる私の境が不分明な時代に生きている。そのような表現の現在に、わたしは特権者でなく、立ち会いたいと思う。

いま・ここからの全力遁走曲

ことり堕つ　死病列島

女ばかりが信心ぶかい　祖国

みんな蹴落とす　方舟のピルグリム

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb